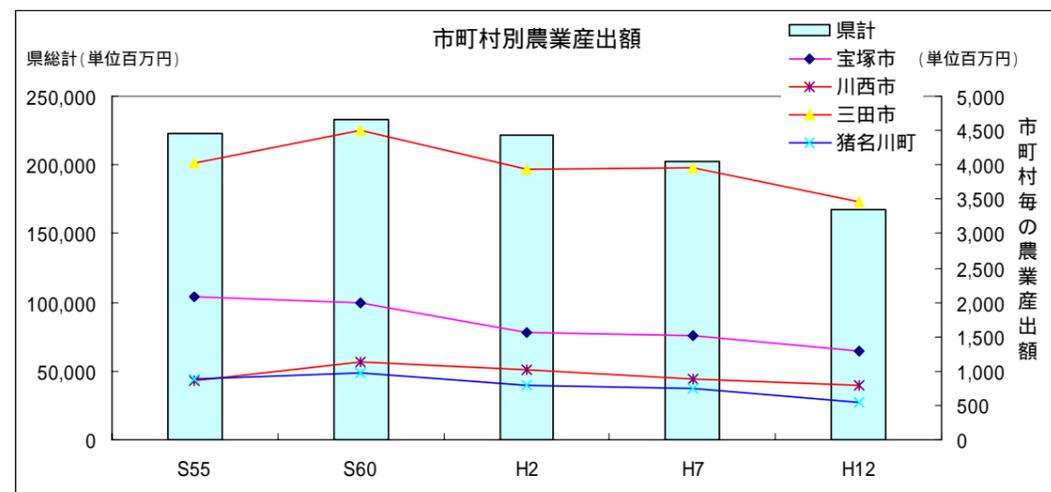


2 - 2 - 7 . 農産物の現状

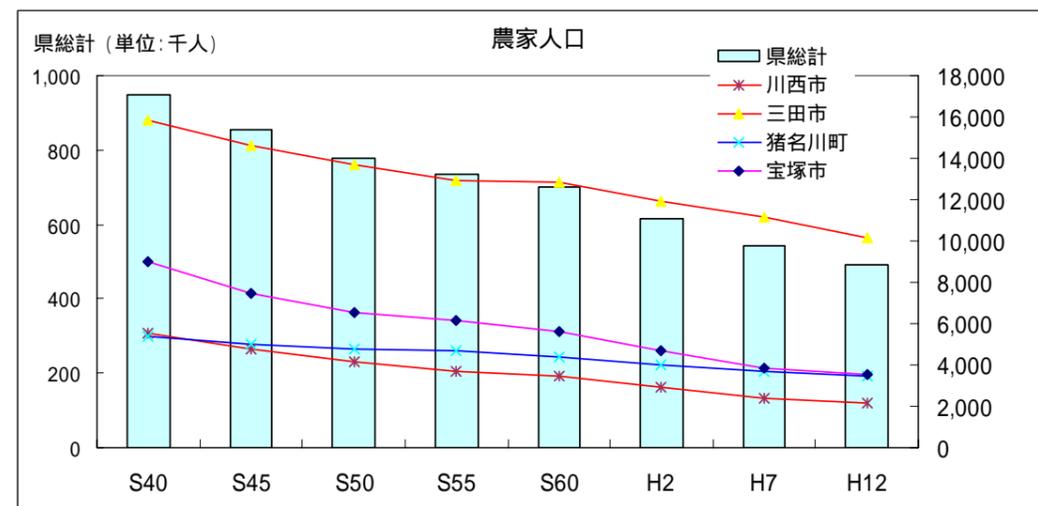
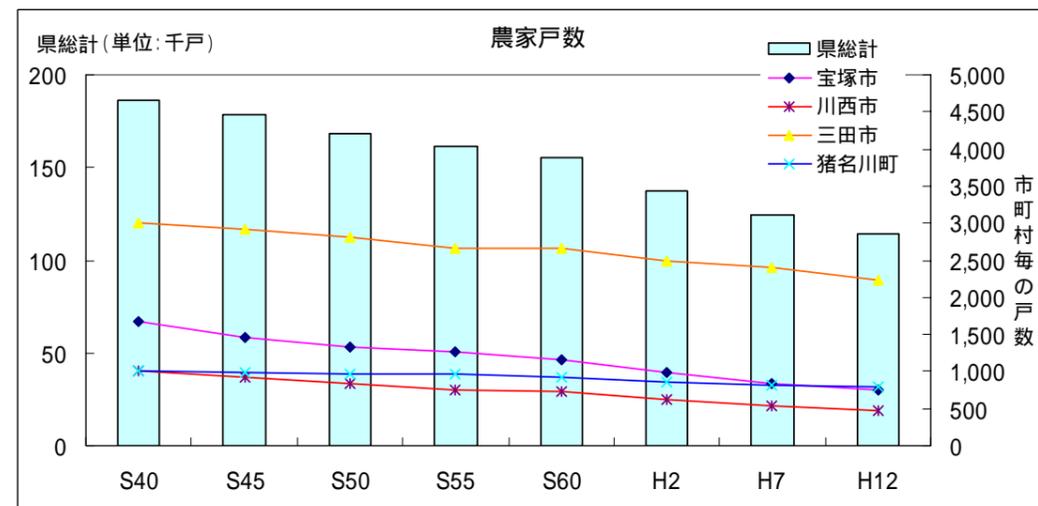
兵庫県全体の農業産出額は、昭和 60 年の 2300 億円から平成 12 年の 1700 億円まで緩やかに減少しています。この傾向は北摂地域の 4 市町でも同様です。農家戸数、農家人口を見ても、過去 40 年間で緩やかな減少傾向が読み取れます。

なお、兵庫県全体の平成 14 年の主要生産物上位 5 品目を産出額ベースで見ると、米（536 億円）、野菜（395 億円）、鶏（249 億円）、乳牛（160 億円）、肉牛（127 億円）の順になります（近畿農政局神戸統計・情報センター「生産農業所得統計」）。



兵庫県南部（北摂地域）の農業産出額

出典：近畿農政局兵庫統計情報事務所 調べ
「生産農業所得統計」結果



兵庫県南部（北摂地域）の農家戸数及び農家人口の推移

(注)1 「農業センサス」は 5 年毎、その内「世界農林業センサス」は 10 年毎に実施されている。

出典：県統計課 調農業センサス

2 - 2 - 8 . 社会経済的現状のまとめ

本事業地は、兵庫県側では伊丹市、尼崎市、神戸市、大阪府側では、池田市、豊中市、大阪市と隣接しています。これらの都市域からごく近い場所に本事業地の里地里山環境が存在しています。

かつて川西市の黒川、一庫で作られた茶道用道具炭（地元では一庫炭と呼ばれました）は、一旦、池田市に集められ、そこから各地に出荷されました。そのため、全国的には池田炭として有名になりました。炭の質の高さもさることながら、生産の場と流通の要が近くであったことも、有名になった理由かもしれません。図 20 で示しましたように、木炭の生産は昭和 40 年以降激減していますが、川西市では現在も続いています（図 21）。これは、茶道用の道具炭（菊炭）の供給であり、生業としての炭の生産が続いていることを表しています。

また、農業などの第一次産業は減少していく一方、ベッドタウンとして宅地開発が進められ、人口は昭和 30 年から平成にかけて急激に増加したのち、現在も緩やかに増えています。伊丹台地、猪名川丘陵は、都市域により近く、ほとんどが宅地開発されています。都市から離れた三田市でも東播丘陵などにフラワータウン、ウッディタウンなどの開発が進められています。

このように、本事業地は大都市域からごく近いことが大きな特徴であり、里地里山環境の保全には都市の人的パワーを活用することも必要であると考えられます。



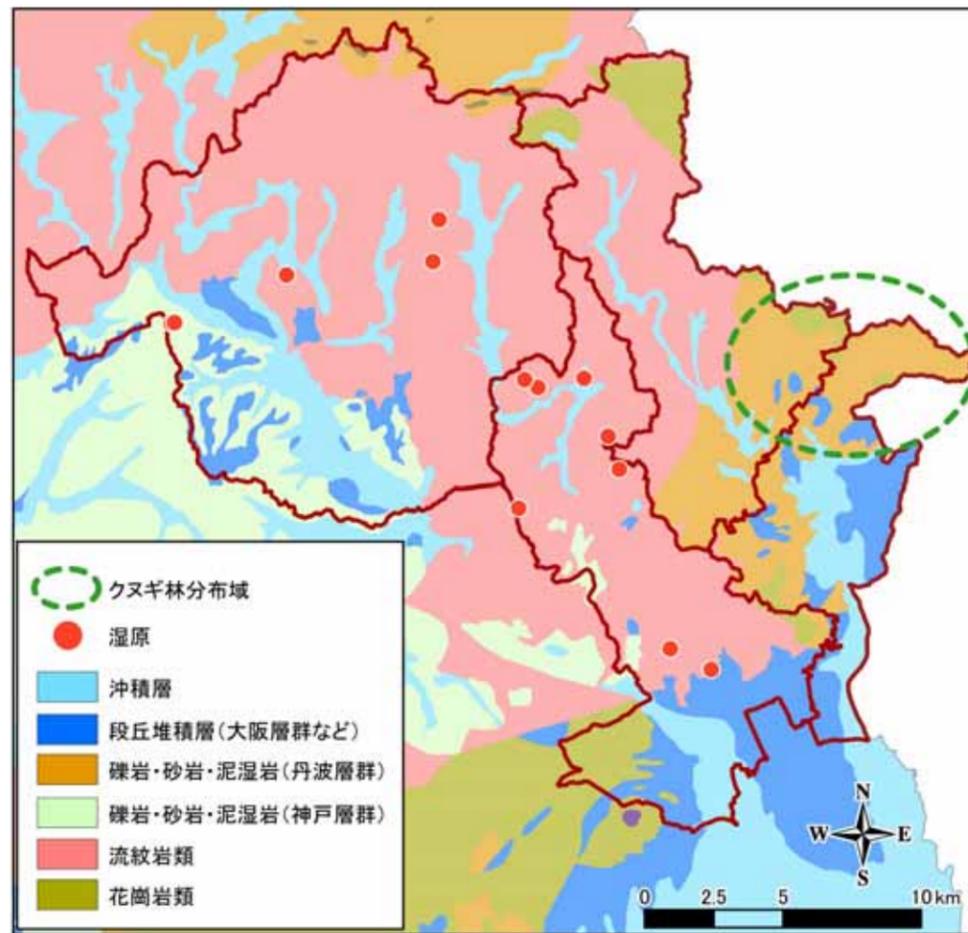
山すそまで広がるニュータウン

2 - 3 . 里地里山の特性と区分

2 - 3 - 1 . 植生と地質

クヌギ林の分布域および湿地の確認位置を重ねて示しました。これを見ると、クヌギ林の分布域は礫岩、砂岩などが堆積する丹波層群（古生層）であることがわかります。これは土壌の発達がよく、保水能力もあるため、コナラなどに比べ水分条件の良い場所を好むクヌギに適した立地だからです。数百年も前からクヌギが植栽され、池田炭が生産されてきましたが、先人もこのような地質の違いをしっかりと認識していたのでしょう。一方、事業地内の山域のほとんどは表層土壌があまり発達しない火山岩の流紋岩からなっており、アカマツ林が成立しています。

また湿地は、流紋岩の地質地帯を中心に神戸層群などに成立しています。流紋岩類上の湿地は、山すそなど基岩が露出した所を表層水がしみ出しているような環境です。神戸層群も同様に基岩が露出し、泥湿岩が不透水層となり、表層水がしみ出して湿地が成立しています。



表層地質とクヌギ林、湿地の分布

2 - 3 - 2 . 里地里山の区分

上述のように、本事業地を地質と植生といったマクロな視点から捉えると、地質及び歴史の特異性からクヌギ林が浮かび上がり、それ以外のアカマツ林（谷部などのコナラ林を含む）が主要な里山環境として抽出できます。一方里地環境としては、沖積地に発達する水田とそれを涵養するため池がその骨格となります。この水田、ため池に加えて、本事業地の特徴の一つである湿地をあわせ、これらを里地環境として抽出することができます。

里山



黒川のクヌギ林

アカマツ林

コナラ林

里地



猪名川町の棚田

ため池

湿地

3. 兵庫県南部(北摂地域)の里地里山の現状と課題

3-1. 日本一の里山、クヌギの生産林の衰退と伝統文化の消滅の危機

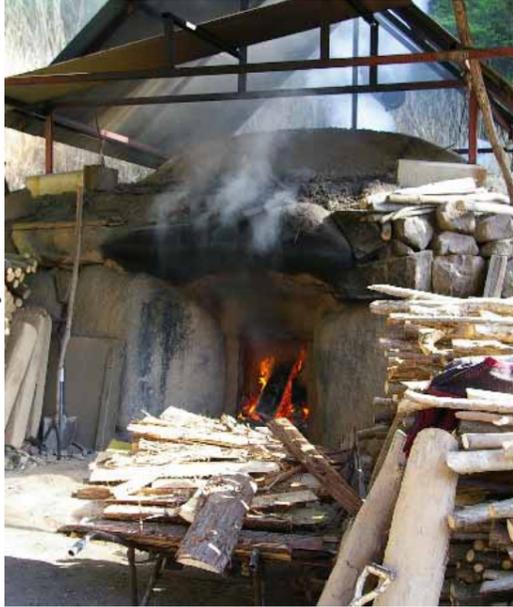
兵庫県と大阪府との府県境にあたる猪名川上流域は、茶道との道具炭として著名な池田炭や一庫炭

の生産地として室町時代から知られています(服部ら、2005)。一庫炭や池田炭はその切口が菊花状で美しく「菊炭」と呼ばれ、火つき、火もち香りが良いことから風雅な茶の湯の席で愛用され、高級炭として現在でも名高い炭です。一庫(池田)の菊炭は歴史的にも名高く、元禄8年(1695年)の「本朝食鑑」に、一庫山中の炭を第一に、関東下総の久留里山中の佐倉炭がこれに次ぐものと紹介されています。そしてこの菊炭を生産している当該地域では、現在でも菊炭の生産が続いており、佐倉炭の生産がなくなった現在、日本一の、そして唯一の生きた黒炭の生産地なのです。

菊炭の生産にはクヌギの原木が最も適しており、そのため江戸末期から盛んにクヌギが植林されました。クヌギは萌芽力が強く、伐採すると株元から萌芽が四方に伸びます。これを数本に間引きし、下草刈り、つる切り、間伐などを行うことで7~8年で直径10cm程度の炭焼きの適材となります。この伐採の作業をローテーションで繰り返すことで常に菊炭の適材を提供する環境を長い歴史の中で作り上げてきました。

これら伐採、萌芽を繰り返して株元が太くなったクヌギの木は「台場クヌギ」と呼ばれ、当地方特有の景観を呈しています。手入れが行き届いた林床が明るいクヌギ林には多くの夏緑植物が生育し、ヒョウモンチョウ類など、明るい環境を好む昆虫が多く生息します。さらに、クヌギの台場の部分は太く複雑な形状となり、オオクワガタをはじめとする里山の昆虫の生息場所を提供しています。このように、台場クヌギの林は北摂地域の生物多様性保全の一助を担ってきました。北摂地域のクヌギ林のように定期的な伐採に伴うモザイク状の里山景観は日本の他の地域ではほとんど見ることができず、この地域は、昔ながらの土地利用が作り出す景観と里山利用の伝統を垣間見ることのできる唯一無二の場所として大変貴重であるといえます。

しかしながら、近年、生活・生産様式など社会経済の大きな変化に伴って、二次林における薪炭林の利用、農用林等としての経済的価値が減少し、薪炭の利用が著しく減少しました。それに伴い、これらの生産を生業とする生産者人口も激減し、これまで培われた菊炭生産の伝統さえも危機的状況となっています。さらに、里山は生産性を失って放置され、特定の照葉樹の優占やツル植物、ササ類の繁茂が見られるようになり、里山の景観や生物相の急激な変化などの問題を抱えるようになりました。特にクヌギ林の里山においては、管理不足や放置に伴ったモザイク景観の消滅、希少種や里山に特有の生物の生息・生育状況の悪化といった問題に加えて、長い年月を経てもクヌギの萌芽更新が行われなくなってしまう。一般に、伐採せずに50年以上の年月を経たクヌギは萌芽更新を行わなくなるともいわれており、また現在当該地域に広がるクヌギ林はこの50年に達するものが多くな



ってきており、伝統的里山林景観を保全する限界の年月を迎えつつあるといえ、今後の管理方針を決定していく必要があります。

<コラム> 日本一の里山について

兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境再生研究部長 服部 保

人手が加わる以前の日本の植生は、大きく照葉樹林、夏緑樹林、針葉樹林に分けられていました。これらを人が開発し、利用することで2000~3000年前から里山が形成されてきました。そしてその結果、日本の里山は、照葉樹タイプ、硬葉樹タイプ、針葉樹タイプ、夏緑樹タイプに4区分される現在の植生になったのです。

照葉樹林タイプはシイ・カシ類を中心とした里山です。沖縄県与那国島、西表島の浦内川流域も人が作り出した里山です。その他、久米島、沖縄島、鹿児島県徳之島、屋久島、宮崎県高城町、綾町、和歌山県古座町、静岡県伊豆半島、東京都御蔵島、八丈島、宮崎県美郷町、宇納間などはみな照葉樹林タイプの里山にあたります。宇納間の里山では、アラカシを用いて備長炭を生産しています。

硬葉樹林タイプはウバメガシを中心とした里山です。このタイプの里山は、備長炭(白炭)の生産が行われ、猪名川上流の黒炭生産が茶道と結びついて維持されてきたのに対し、備長炭の生産は食文化との結び付きが強い里山といえます。

そして、最後の夏緑樹林タイプの里山はコナラ、クヌギ、ナラガシワ、カシワ、クリ(シバグリ)等多くの樹種を中心とした里山です。北摂の里山は夏緑樹タイプです。

日本のクヌギ林はほぼ全て植林に由来すると考えられています。長崎県の海岸沿いには植林が困難な断崖にクヌギ林が成立している地点があり、これをクヌギの天然林としている研究者もいますが、近くにクヌギ人工林があり、ここから種子が分散してきた可能性もあります。全国には、以上のようにさまざまな里山がありますが、現在も人手が加えられている本物の里山は猪名川上流域だけに残されている状況です。

この猪名川上流域の炭は古書籍に古くから記載されています。そして、「池田炭」の記述がある古書籍はきわめて多く、29文献にも達しました。これは有名な横山炭や光滝炭よりも多いのです。また、千葉県佐倉市の佐倉炭が、現在はクヌギ林自体が全く残っていない状態となった現在、いまだ生産を続けている一庫地域の菊炭生産は非常に貴重であるといえます。文献によれば、猪名川上流の1670年代のクヌギ林は止々呂美から黒川周辺にかけての一带に限られていたようです。延宝村絵図は1600年代の植生図と言えるものですが、そこには尾根にマツ、斜面にクヌギ林が広がっていた様子をうかがうことができます。

黒炭を生産している場所は猪名川上流域以外にもありますが、生業として木炭生産がなされ、かつての景観が残されており、薪炭林が順調に再生し、維持管理のために市民ボランティアが活動するなど、さまざまなことが一体的になって機能している里山は全国でもここだけです。この日本一の里山は、人と自然の共生のモデルとして特筆できる地域であり、クヌギ人工林には多様な生物相が見られ生物多様性保全のための重要な生態系でもあるのです。

(シンポジウム「里山よ、元気を出してくれ。」講演より抜粋)

3-2. アカマツ・コナラ林の荒廃、マツ枯れ等の危機

北摂地域の里山林は主にコナラ、クヌギ、ミズナラ、アベマキなどに優占される夏緑型の里山とシイ、カシ、タブなどが優占する照葉型の里山、そしてアカマツ林やクロマツ林に代表される針葉型に分けられます。

北摂地域ではこのうち、アカマツ林がもっとも広い面積を占めています。三田市、宝塚市、川西市、猪名川町の山地尾根部や斜面上部に発達しています。しかしマツ枯れのためにアカマツ林は近年減少しており、良好な樹林は非常に少なくなっています。アカマツ林に代わって増加しているのがコナラ林 - アベマキ林で、三田市や宝塚市などでは山麓部や谷部に広がってきています。



先に述べたように、生活・生産様式など社会経済の大きな変化に伴ってこれらの里山林は利用・管理がなされなくなり、放置されている状態が近年目立っています。そこでは、照葉樹の繁茂やネザサの密生により、種構成の単純な暗い森林へ遷移していく問題が生じています。照葉樹（ヒサカキ、ネズミモチ、ヒイラギ、アセビ、アラカシ、ツバキなど）が繁茂すると、林内が暗くなり、ツツジ類や夏緑草本などが減少します。ネザサの密生も同様で草本類の生育を阻害し、ギフチョウの食草であるカンアオイ類も激減します。

コシダ・ウラジロなどのシダ類が密生すると、林床には他の草木類が全く生育できない環境となります。また林床には枯れた葉が多量に堆積し、山火事の原因となっています。また、フジヤクスなどのツル植物も繁茂し林冠を覆ってコナラなどの高木を枯らします。

放置に伴う植生の変化に加え、マツ枯れや竹林の拡大も近年の里山の大きな問題となっています。マツ枯れは外来生物であるマツノザイセンチュウがマツノマダラカミキリによって伝播されることによって生じ、これまでに多くのアカマツが枯死してきました。現在でもマツの枯死木が目立ち、景観的劣化も指摘されており、倒木などの危険があるため、マツ枯れ跡地への対策も必要となっています。竹林、とりわけモウソウチク林はかつてタケノコや竹材生産の場として利用されていましたが、これもタケノコの自給率が低下して利用されなくなってきたことでタケが繁茂し、暗い林内を呈しています。タケ類は、わずか1ヶ月でタケノコから群落高 10mを超える桿を生長させるため、光をめぐる競争にきわめて有利であり、樹木からなる群落と異なり林冠ギャップが生じないため、林床が一様に暗くなり、林床植物の多様性を著しく低下させます。

さらに人の手が里山に入らなくなったことで、人と動物の緩衝地帯が激減してしまいました。人が管理しない里山ではイノシシやシカなどが増加し、農業被害や林業被害をもたらしています。

すべての里山林を以前の生活方式と同様に整備・管理するのは大変難しいことです。しかしながら、その場所ごとに応じた、生物多様性に考慮した、そして経済的な手法で適切に管理され、それをレクリエーションの場や憩いの場として、また環境教育の場として市民が利用することが求められています。

3-3. ため池・湿地・棚田の希少種

北摂地域の里山の生物多様性を保全する上で、里山林に加えて、ため池や湿地などの陸水環境が重要です。このような水域としては、例えば棚田を含む水田やその周辺の用排水路、灌漑用のため池など、水田耕作に関連したものが代表的です。

降雨が比較的少ない兵庫県には、日本の都道府県の中で最も多くのため池が存在すると言われます（内田，2003）。加古川下流域などの平野部ほどではないものの、北摂地域の里地里山にも多くのため池が存在しています。このようなため池は、古い時代に谷に沿って開かれた水田の最奥部に位置しています。ため池の周囲は石垣などで囲まれ、池の管理がしやすいように堤防の草は定期的に刈り取られていました。このようなため池には、トンボ類をはじめとするさまざまな水生昆虫やジュンサイ、ヒシといった水生植物、ドジョウやメダカなどの淡水魚類、カエルやイモリを含む両生類など、さまざまな生物が生息・生育していました。堤防は草地として維持され、キキョウやリンドウなど草原性の植物や、多くのチョウ類を含む草原性の小動物の貴重なすみかとなっていました。

ため池につながる水路や水田にも多くの生物が見られます。水路はホタル類の幼虫の生息地となり、緩やかな流水を好むカワトンボ類など、ため池には見られない生物種が出現します。季節的に浅い水を湛える水田（田面）には、稲作のサイクルに合わせてカエル類やトンボ、メダカなどが出現します。このように、稲作はその水の管理を通してさまざまな生物に生息・生育環境を提供してきました。

しかし、水田を中心としたこのような環境は近年になって大きく変化しました。ため池や水路のコンクリート護岸によって岸辺の環境が変化した結果、一部の水草や水生昆虫にとって生息しにくい環境になりました。乾田化に伴い、早春の田面には水がなくなり、アカガエル類の産卵場所が失われました。また、かつてのような管理が停止した結果、堤防の草が消失したり、堤防そのものの崩壊までもが心配されています。

棚田やため池等水田耕作に関連したものの以外の水域環境として、宝塚市の丸山湿原に代表される自然湿原があります。丸山湿原や皿池湿原は比較的規模の大きい湿原であり、ヒメタイコウチやサギソウなどの貴重な動植物の生息地として注目されます。また宝塚市北部の松尾湿原は、きわめて小規模なものでありながら、現在は数が少なくなってしまった貴重な植物が見られ、市の天然記念物に指定されています。いずれの湿原でも、周囲の樹木が育ちすぎたり、乾燥化が進んだりして環境の悪化が指摘されています。

北摂地域の水域環境には、絶滅危惧種を含む多くの生物が今なお依存しています。このような水域の希少種には、ラン科やタナゴ類のように乱獲のおそれが高い種群が多く含まれるため、生息・生育情報の公開には十分な検討を重ねる必要があります。一方で、それらの希少種は環境の開発や放置、

遷移の進行に伴って人知れず姿を消しつつあります。まずは、この地域の水域環境を対象とした生物調査の実施が必要です。その上で、生物の生息情報を環境教育の教材として利用するなど、情報を地域で共有・活用しながら行政と研究者、地域住民が一体となって生息環境を守ることが求められています。



4. 兵庫県南部(北摂地域)の里地里山保全再生に係る基本的な考え方

4-1. 北摂地域里地里山保全再生の高次目標

私たちの暮らしは、多様な生物からなる生物多様性の上に成立しているといっても過言ではありません。このことは2002年に策定された新・生物国家戦略でも強く認識されています。兵庫県南部(北摂地域)の里地里山保全再生モデル事業における地域戦略においても、この「生物多様性の保全」を高次目標とし、生物多様性の保全に配慮した里山の管理や人との共生を行っていきます。北摂地域における伝統と、伝統により維持されてきた景観の保全・再生、そしてその景観や伝統により保全されてきた生物の多様性の保全・再生を目指すことが本モデル事業の地域戦略の目標です。



「魅力ある地域づくりのために、人と自然の適切な交流(管理等)がなされ、それを通して生物多様性の保全・再生が図られていくこと」が望ましいと考えられます。

4-2. 北摂地域の里山保全のための方向性(タイプ区分)

北摂地域は、都市からも近い場所に位置しアクセスもよいことから、都心に住む人達が気軽に訪れ、里山についてのさまざまな知識を体験・学習し、里山の管理を行うことの出来る条件を兼ね備えています。そして、行政と密に連携をとりつつ里山管理を行っている質の高いNPOがしっかりと根付いて活動を行っている地域でもあります。さらに、本地域では兵庫県立人と自然の博物館が情報の蓄積や解析、そして情報の発信を行う研究機関として重要な役割を果たしています。

このような恵まれた条件を最大かつ有効に活用し、里地里山の保全再生を図っていく必要があります。そのためには、まずは土壌や植生といった自然環境の違いによる生物多様性の質の向上を図ることの出来る管理方法を見極め、伝統的管理方法などを取り入れた管理方法や、管理に必要な経済的側面を考慮した方法を適切に採用する必要があります。

前述のように、北摂地域にはいくつかの異なる表層地質が分布しており、それに応じて里山林を構成する樹種に若干の違いが見られます。三田市から宝塚市にかけての一带には流紋岩類が分布し、アカマツやコナラの優占する里山林が広がっています。一方、川西市から猪名川町にかけては丹波層郡が分布し、ここでは炭焼用のクヌギの二次林が古くから維持されてきました。さらに、兵庫県は全国でも最も多くのため池が存在すると言われ(内田, 2003)、ここ北摂地域でも多くの希少種をはぐくむ水辺環境が現在でも保たれています。

以上の自然環境特性から、北摂地域の里地里山の構成要素を次の3タイプに大別することが妥当であると考えられます。

1. アカマツ - コナラ林の里山管理
2. クヌギ林の里山管理
3. ため池・湿地・棚田の里地管理

そして、各タイプにおいて適切な管理を行うため、それぞれのタイプごとに目指す目標設定を行い、そのための管理を実施していきます。

4-3. 3つのタイプ(テーマ)ごとの管理目標

3つのタイプ毎に自然環境や管理状況などが異なることから、各タイプにテーマを掲げ、目標設定を行って里地里山の保全再生を図っていきます。タイプ区分ごとのテーマと目標を以下に記述します。

(1) アカマツ - コナラ林の里山管理

アカマツ - コナラ林の優占する地域では、非常に広い面積の里山が放置されたままになっています。こうした里山を昔の生活様式を当てはめ、同様の管理(低木林管理)を目指して管理を行うと、大変なコストと労力が必要となります。しかしながら現状としては、管理が必要な面積とコストや労力とのバランスは社会経済的側面からも現実的とはいえない状況です。そこで、生物多様性保全と多様性の質の向上を考慮し、さらにコストや労力の面からも現実的な手法である環境高林への移行を目指します。環境高林は、特定の種(照葉樹などの低木や林床を覆うような植物)のみを伐採し、太陽光が林床にまで届く明るく、レクリエーションの場としても適切な二次林です。



そのためには伐採種や保全種を指定します。これにあたっては、植生調査と毎木調査の結果をもとに伐採対象の種と保全対象の種を決定する必要があります。また、除伐、間伐の割合がどの程度になり、管理後どのような状態になるのかを予想し、除伐率、間伐率を設定することも必要です。これらの設定に問題点があれば検討し直す必要があります。こうした調査と実施とモニタリングを一連の作業として行うことが特徴といえます。県が実施する里山林整備事業に代表されるこれらの管理方式は「兵庫方式」と呼ばれます。さらに、市民が綿密な現地調査を行いつつ小面積ながらきめ細かい管理を実施するやり方は「三田方式」と呼ばれます。

アカマツ - コナラ林では、「兵庫方式(三田方式)」をテーマに里山の管理を行います。

(2) クヌギ林の里山管理

川西市では、炭焼用のクヌギが古くから植林され、管理されてきた地域です。しかし、前述のように、生産林として活用されなくなったクヌギ林は放置され、樹齢が高くなり、萌芽林としては機能しなくなってきています。さらに、伝統的菊炭の技術も危機的状況となっています。しかし、本地域ではいまだ生きた里山景観を見ることが出来る日本で唯一の地域であり、また日本一の炭、一庫炭(菊炭)を生産する地域であることから、「日本一の里山」をテーマに生産林を保全し、また再生することが目標です。



そこで、地勢や植生をきちんと把握した上で、景観の保全を行う地域、つまり生産林として活用す

る場を官・民が一体となって再生させていく必要があります。そのために、現在も続けられている菊炭生産林の管理をNPOが支援したり、私有地や企業有地の生産林としての管理を推進します。また同時に菊炭生産の技術をNPOや菊炭生産の中心地である一庫公園などで伝承・継承し、広く一般の人にも菊炭や日本一の里山の価値を認識してもらう機会を作ります。

管理が難しい地勢の里山や萌芽林としては適さない場所では、アカマツ・コナラ林の管理と同様に、環境高林への移行を促し、レクリエーションの場としての管理を行います。そして、これらの管理が行われている森林では、研究機関や専門家と協働で生物多様性に関するモニタリング体制を確立し、これらの情報を広く全国に情報発信することも必要です。



このように、クヌギ林の里山では、科学的手法によるデータを整理しつつ、「日本一の里山」をテーマに里山林管理を行います。

(3) ため池・湿地・棚田の維持管理

ため池と棚田は稲作のために人によって創出され維持されてきた環境ですが、休耕に伴い維持管理が停止して環境の劣化が進行しています。また自然湿地においても、乾燥化や遷移の進行、希少種の乱獲などの問題が指摘されています。

里地におけるこのような水域環境の維持に当たっては、現状を把握するための基礎的データの収集が必要です。これまでも、NPOや博物館によってさまざまなデータ収集がなされてきました。三田市環境部環境課が平成15年に発行した「未来に伝えたい三田の自然～生態系レッドデータブック～」には多くのため池や湿原が紹介されており、行政と専門化が協働して基礎的データを収集し公表したよい例といえます。他の地域においても同様の調査が実施されており、今後、多くの関係者が情報を共有し、保全のために活用されることが期待されます。

ため池、湿地、棚田の環境を維持するためには、積極的な管理を行い、希少種の生息・生育地を復活させることが必要です。希少種の生息・生育するため池や棚田を適切に管理し続けることは、地域の生物多様性を保全する上で重要な意味を持ちます。自然湿原に関連して、宝塚市の松尾湿原では繁茂しすぎた周辺の樹木を伐採し観察路を整備するなどの自然再生が実施されており、湿原の積極的な

管理の先駆的な例として注目されます。このような小規模な湿原はかつてあちこちに見られたようですが、開発に伴い現在はわずかに残存するだけになっています。

さらに、このような水域環境の重要性を地域住民と共有し、環境教育への活用を図ることが求められます。

以上の3テーマごとに地域を大きく分け、課題を掲げた「地域戦略イメージ図」を次ページに示します。里山林再



生事業などを核としたアカマツ・コナラ林の里山、今なお木炭の生産が続けられているクヌギ林の里山、そして多くの希少生物を育むため池・湿地・棚田などの水域環境、これら三者を取り上げて、具体的な取り組みを進めていきます。

5. テーマ別の取り組み事項

本モデル事業においては、北摂地域の里地里山を舞台に、さまざまな主体がそれぞれのできる範囲で保全再生に係る取り組みを実施します。ここでは、次ページの「地域戦略イメージ図」にて提案された3つのテーマごとにさらに具体的な取り組み(個表)事項を紹介します。



兵庫県南部（北摂地域）地域戦略イメージ図



**アカマツ林・コナラ林の里山の維持管理
～兵庫（三田）方式管理～**

A 4つの里山林再生事業地
【地元との連携】
・4事業地での維持管理の継続と利活用メニューの充実による参画者の拡大

- 1) 高平観福の森
- 2) 高平ナナマツの森
- 3) 栢原めぐみの森
- 4) 亦楽山荘（桜の園）

B CSR事業地
【里地里山保全の啓発と環境学習】
・4整備が進められているCSR事業地での利活用と他事業地との連携

C 有馬富士公園
【ボランティアの育成と活動メニュー】
・里山保全活動を行う住民グループとの連携

**クヌギ林の里山の維持再生
～日本一の里山の保全と再生～**

A 黒川地区
【生きた生産林としてのモザイクの景観の保全】
・ボランティアとともに、企業、行政の3者の協働による生きた生産林・里山の保全

B 一庫公園
【見本林整備の試行や体験による環境学習と広報】
・県立一庫公園におけるボランティアによる見本林の整備や環境学習・広報

C 一庫ダム管理所
【苗木植栽によるクヌギ林再生と広報】
・里山保全活動を行う住民グループとの連携

ため池・湿地・棚田の維持管理

A 丸山湿原【兵庫県最大級の湿原の保全と活用】
・西谷地区湿原群保全活用研究会との連携による丸山湿原の保全・活用

B 松尾湿原【湿原の再生と施設を活用した環境学習・広報】
・湿原の再生と拠点施設を活用した環境教育や広報による啓発活動

C 栢原の棚田【里地環境の生物情報の収集】
・棚田、畦、ため池などの生物情報の収集

- エリアイメージ
- エリアイメージ
- エリアイメージ
- 拠点施設の連携
- 拠点施設
- 里地里山保全活動地等
- 重要なため池・湿地・棚田等

【対象地域全体】

- 拠点施設・各種活動団体のネットワークの強化
 - ・拠点施設のネットワーク化
 - ・拠点施設を活用した積極的な交流や環境学習の実施
 - ・先行的に活動している「団体」及び「場」が相互に連携し、情報・技術の交流を図る
- 人と自然の博物館における研究成果の活用
 - ・科学的データの蓄積
 - ・科学的知見に基づいた里地里山保全の検討と実施
 - ・モニタリングと科学的評価に基づく適切な保管理の実施
- 全国との連携／他地域との情報交換
 - ・情報の全国発信
 - ・里山シンポジウムの開催
 - ・阪神北里山博物館事業
 - ・里地里山通信の作成等
- 産・官・学・市民が一体となった保全・活用
 - ・多様な主体の連携による広域的かつ計画的な保全
 - ・地域の資源を活用した自主的かつ継続的な取組の実施
 - ・地域戦略推進の仕組みづくり